

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢事
長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢事長ヨリ始審裁判所檢事
ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可ヤ裁判所
ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢事長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ
作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附
記ス可シ

○大審院

第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁
判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其
院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事委任ノ順序ニ從ヒ其職務
ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢事長又ハ其指名
シタル檢事之ヲ行フ

○第六章 大審院

○高等法院

○對照長文ナルヲ以テ略ス
刑法第二編第一章第二章ヲ參看スベシ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ關シ其裁判ス可キ事件及ヒ關院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ
一 裁判長一名 陪席裁判官六名 但元老院議官大審院判事

中ヨリ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二 豫備裁判官二名 但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢察長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

○第七章 高等法院

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルヲ得

一 關席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件變多キル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルヲアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

○第四百三十九條再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スルヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スルヲ得ス

○第四百三十九條再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スルヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スルヲ得ス

哀訴スルヲ得 一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セザル時
 二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サザル時、三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三 犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

●犯罪ノ
 捜査起訴
 及ヒ豫審
 ○捜査

○對照長又ナ
 ルカ故ニ之ヲ
 累ス第百七條
 以下ヲ參着ス
 可シ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審
第一章 捜査
第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴發見ノ其 <small>他ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思 辨シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ 規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ</small>

○第三編犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審○第一章捜査 十七

△告訴及
告發

○第一百十四條
ヲ參看スベシ

第一節 告訴及告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタ
ル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判車檢車
又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得

豫審判車告訴ヲ受ケタル時ハ第一百十四條以下ノ規則ニ
從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

○第一百七條ヲ
參看スベシ

檢車告訴ヲ受ケタル時ハ第一百七條ノ規則ニ從ヒ其處分
ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢車ニ送
致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司
法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官

ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實ヲ考ト爲
ル可キヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第一百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲
ルヲ得

第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ
之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スルヲ得其告訴ヲ受ケタル
官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印

ス可シ若シ告訴人署名捺印スルヲ能ハザル時ハ其旨ヲ
附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

○第一百十條以
下ヲ參看スベ
シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルコトヲ
 認知シ又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務
 ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ
 告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル
 可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ
 違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ
 第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ
 重罪輕罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條
 ノ規則ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢
 事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得
 告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分
 ヲ爲ス可シ

○第九十四條
 ナ參看スベシ

○第九十五條
 ナ參看スベシ

○第九十三條
 ナ參看スベシ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得
 但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス
 無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效
 アリトス

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更
 スルコトヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人
 ヨリ要償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第一百條 現行犯罪トハ現行ニ行ヒ又ハ現行ニ終リタル際
 ニ發覺シタル罪ヲ云フ

第一百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス
 一犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレ、時

○第十六條被
 告人免訴又ハ
 無罪ノ言渡ヲ
 受ケタル場合
 ニ於テ其訴訟
 ノ原由告訴人
 告發人又ハ民
 事原告人ノ惡
 意若クハ重キ
 過失ニ出テタ
 ル時ハ是等ノ
 罪

△現行犯

○起訴
△檢察官
ノ起訴

ス可シ

被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ
送ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由
アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第七條 檢察官ノ起訴ノ手續ハ左ノ手續ヲ爲
ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求
ム可シ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫
審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書
ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬
セザル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所

檢察官ニ送致スベシ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴文理ス可カラサル者ト
思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢
事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲
ル可キ重物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名

及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

○第二章 起訴

△民事原告人ノ起訴

第二節 民事原告人ノ起訴

第一百條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サシトスル時ハ公訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時ハ其旨ヲ檢察ニ通知ス可シ

第一百一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所

○豫審

ヲ變更スルヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得

第一百二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第一百三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章

ニ定メタル規則ニ從ヒ檢察又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヲ得ス此規則ニ背キタル時

ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第一百四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ
告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ
訊問スルヲ得若シテ續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シ
タル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第一百五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急遽ヲ要スル時
ハ直チニ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後
勾留狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事
ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス
可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、
ル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ
礙ト爲ルヲサカル可シ

第一百六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發
ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急遽ヲ要ス
ル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ
爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ
地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留
狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第一百七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シ
テ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付
ス可シ

又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヲ得

第一節 令狀

△令狀

第一百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因
 リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ
 召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間
 少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ
 召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可
 シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過タルトテ得ズ
 第一百十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄
 地内ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人
 所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルトテ得
 第一百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時
 ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルトテ得
 第一百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀

ヲ發スルトテ得
 一 被告人定リタル住所アラサル時
 二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時
 三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケン
 トスルノ恐アル時
 第一百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ
 發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致スベシ
 勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊
 問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ
 非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ
 第一百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事
 ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判

車ノ取調ヲ求ムルヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假
ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引状ヲ發シタル豫審判事ニ其
旨ヲ通知ス可シ

第二百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引状ヲ發シタル豫審
判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明
示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引状ヲ以テ
被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ
其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其
旨ヲ勾引状ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ
被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引状ヲ以テ管轄豫
審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條 豫審判事ハ召喚状又ハ勾引状ヲ受ケタル

○第二百二十三
條勾留状ヲ發
シタル前被告
人既ニ豫審判
事ノ管轄地外
ニ在ル時ハ被
告人ヨリ其所
在ノ地ノ豫審
判事ノ取調ヲ
求ムルヲ得
其求ヲ受ケタ
ル豫審判事ハ
假ニ被告人ヲ

被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令状ニ應スル能ハザ
ルヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問ス
ルヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地
ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二百二十六條 勾留状ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條
ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑
ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得
ス

第二百二十七條 豫審判事ハ勾留状ヲ執行シタルヨリ十日
ヲ過クル時ハ之ヲ收監状ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ
規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ
檢事ハ被告人ヲ責付スルヲナク更ニ十日間之ヲ勾留ス

勾留シ速ニ勾引状ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

○第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

可キヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第二百二十八條 收監状ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢車ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非ザレハ之ヲ發スルヲ得ス

第二百二十九條 收監状ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ概要及ヒ加重減輕ノ模範アル時ハ其概略
- 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
- 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルヲ

第三百十條 總テ令状ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚状ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令状ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及

ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引状勾留状收監状ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第三百十一條 召喚状ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局

所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第三百十二條 勾引状勾留状收監状ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルヲアル可シ

前項ノ令状ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其原本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百十三條 令状執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其

家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ

○對照長文ナレハ之レヲ略

○第二十三條 中第二項送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其三通ニ署名捺印セシム

若シ署名捺印スルヲ能ハサ

ル時ハ其旨ヲ
附記スベシ
第四項送達人
ハ書類ヲ受取
タル者ノ氏名
場所及ヒ日時
ヲ其二通ニ記
載スベシ

其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求
メ之ヲ搜索ス可シ
巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書
ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ
家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲ス可シ
第三百三十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シ
タルトナ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ
被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得
巡査被告人所在地ノ豫審判事檢事又司法警察官各該管轄執行承可シ
第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スル
能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ
送致シ搜索及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜索
及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ
第三百三十六條 陸海軍在官ノ軍人軍属ニ對シ令狀ヲ發シ
タル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムコトヲ得
サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシ
ム可シ其行軍ノ際亦同シ
第三百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速
ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ
引致スルコト能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコ
トヲ得
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ
受取り其證書ヲ渡ス可シ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタルヲ又執行スルヲ能ハサル時ハ其車由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第三百三十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ授見スルヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閱ヲ經タル後ニ非

△密室監禁

サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫審檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁ス

ルノ言渡ヲ爲スヲ得

第四百四十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名
 毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ
 他人ト接見シ又ハ書類^{カクハ}其他ノ物品ヲ授受スルヲ
 許サス

食物飲料^{シヤウ}洗滌^{セン}其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長
 ノ特ニ指名シテ之ヲ給與セシム

第四百四十五條 密室監禁八十日ヲ超過入可カラス但十日
 毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常
 ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

△證據

第三節 證據

第四百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模樣ニ因リ有罪
 ナルノ推測ヲ定ムルナシ

被告人ノ自狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定
 人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百四十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請
 求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトス
 ル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百四十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告
 人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ
 調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ證據ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル

△被告人
ノ訊問及
ト對質

時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問
スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞
カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可
シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ

但シ檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急遽ヲ要ス
ル時ハ此限ニ在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自狀セシム
ル爲メ^{ヤコソク}認^カ麻^カ又ハ^{サケ}許^ク言^フヲ用フ可カラス

第四百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之
ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名
捺印セシム可シ若シ署名捺印スル不能ハサレ時ハ其旨
ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルトテ記載シ豫審判事ト共
ニ署名捺印スベシ

第四百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キトテ
申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問
及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第四百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルトテ得

第四百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルト人違ナキ

○第五百五十一
同百五十二條
ヲ參看

「其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要
ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者
ト對質セシムルヲ得

第五百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生ス
ル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ
讀聞カス可シ

第五百五十一條 第五百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之
ヲ適用ス

第五百五十六條 被告人又ハ對質人轉ナル時ハ書面ヲ以テ
問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聲者啞者文字
ヲ知ラサル時ハ通車ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百五十七條 通車ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可
シ

書記ハ通車ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ
第五百九十二條 第五百九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ
亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押
第五百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトス
ル時ハ重罪輕罪ノ別所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ
又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス
可シ

第五百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ
被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作

△檢證及
ヒ物件差
押

○第五百九十二
條 鑑定人ハ書
記局ヨリ呼出
狀ヲ以テ之ヲ
呼出ス可シ其
呼出狀ニハ犯
罪事件ニ付キ
鑑定ヲ命スル
丁及ヒ呼出ニ
應セサル時ハ
罰金ヲ言渡ス
可キヲ記載
ス可シ

鑑定人呼出三
 應七サハ時ハ
 第百七十六條
 ノ規則ニ從ヒ
 處分ス可シ但
 勾引狀ヲ發ス
 ルヲ得ス
 第百七十七條
 ノ規則ハ本條
 ニモ亦之ヲ適
 用ス
 第百九十三條
 鑑定人ハ正實
 ニ鑑定ス可キ
 ノ宣誓ヲ爲ス
 可シ其宣誓ハ
 凡可シ
 又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ
 第百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物
 件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキト又ハ犯罪
 ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘ
 テ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞
 送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ
 第百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ
 其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看
 守者ヲ置クヲ得
 第百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明
 ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルト

第百八十條ノ
 式ニ從フ
 書記ハ鑑定人
 ノ宣誓シタル
 下ヲ鑑定命令
 書ノ紙尾ニ記
 載シ之ニ宣誓
 書ヲ添置ク可
 シ
 第百九條鑑定
 人及ヒ通事ニ
 ハ振費給料其
 他相當ノ費用
 ヲ給與ス可シ
 ○第百三十三
 條第三項家宅
 ヲ得
 被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同
 居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス
 第百三十三條第二項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又
 ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得
 若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ら立會フヲ得ス但
 豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラ
 ス
 民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フ
 下ヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラ
 ス

捜索ハ日出前
 日没後之ヲ爲
 ストテ得ス
 ○第百六十條
 豫審判事ハ臨
 檢ノ場所ニ於
 テ發見シタル
 物件其出所及
 ヒ規模ニ因リ
 被告人ノ人違
 ナキト又ハ犯
 罪ノ模様ヲ知
 ルニ足ル可シ
 ト思料シタル
 時ハ之ヲ差押
 ヘテ認印ヲ爲

第百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ
 物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ
 第百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ
 其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ
 第百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クトテ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ
 第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

シ目錄ヲ作ル
 可シ但其物件
 ヲ監護シ又ハ
 遞送スルハ書
 記之ヲ擔任ス
 ヘシ
 ○第百七十條
 以下ヲ參着ス
 ベシ

第百六拾七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルトヲ禁スヲ得
 若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルトヲ得
 第百六拾八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルトヲ得
 第百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ電報鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開拔スルトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

△第六節
證人訊問

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ
還付ス可シ

第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ

證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從

ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ

付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限り先ツ之ヲ

呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限

ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證

人トシテ之ヲ呼出スヲ得

○第二十三條

送達書ハ二通

ヲ作り其一通

ヲ本人ニ渡ス

可シ本人ニ渡

スヲ得サル

時ハ其住所ニ

於テ同居ノ親

屬又ハ雇人ニ

渡ス可シ

送達人ハ之ヲ

受取リタル者

ヲシテ其二通

ニ署名捺印セ

シム若シ署名

捺印スルヲ能

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可

シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可

シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所

書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサ

ル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ

得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又

ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ

以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

ハサル時ハ其
旨ヲ附記ス可
シ
同居ノ親屬又
ハ雇人ニ書類
ヲ渡スヲ得
ス若クハ是等
ノ者之ヲ受取
ルヲ肯セサ
ル時ハ其地ノ
戸長ニ渡置キ
戸長ハ其書類
ニ認印シ速ニ
本人ニ送達ス
ルノ處分ヲ爲
ス可シ

第一百七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記
載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡
シ且勾引スルヲアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出延トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ア
ル可シ

第一百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出
スニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所
在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第一百七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬
ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官
ハ即時ニ出延セシム可キヲ認可シ又ハ職務上已ムト

送達人ハ書類
ヲ受取リタル
者ノ氏名場所
及ヒ日時ヲ其
ニ通ニ記載ス
可シ
本條ノ規則ニ
背キタル時ハ
書類送達ノ効
ナカル可シ
送達人ハ其一
通ヲ書記局ニ
還納シ書記局
ニ於テハ送達
ノ證トシテ之
ヲ保存ス可シ

ヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出延ノ延期ヲ豫
審判事ニ請求ス可シ

第一百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合
ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ

二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シ
テハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼
出狀ヲ送達シ又ハ直ニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費
用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡
シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ

第一百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ

○第七十三條參看

受ケサルコト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ

○第八十一條參看

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記スベシ宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サズ但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一十六歳未満ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者
 三瘡腫者
 四公權ヲ剝奪セラレ又公權ヲ停止セラレタル者
 五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ
 重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラ
 レタル者
 六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ會テ訴ヲ受ケ其證據
 充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者
 第八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯
 セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條
 二從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ
 控訴ヲ許サス

○刑法第百八十條裁判所ヨリ證人トシテ證據ヲ陳述スルヲ命セラ

レタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ亦前條ニ同シ
 ○第百七十六條參看
 ○第百五十六條
 第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得
 第八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得
 若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
 第八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受タル者ハ前項ノ例ニ在ラス

條被告人又ハ對質人擧ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ唾ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ雙者唾者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ
 被告人又ハ對質人國語ニ通ゼサル時又同シ
 ○第百五十七條通事ハ正實

二付テモ亦之ヲ適用ス
 第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ヲ就テ陳述ヲ聽ク可シ
 第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ
 其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルト又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載ス可シ
 第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違十キヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
 證人ハ其陳述ヲ變更増減セシトテ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名

△鑑定
 二通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ
 書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ
 ○第百九十二條第百九十三條第百九十四條第百九十五條規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

捺印スルト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
 第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルトヲ得
 若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ償金ヲ要ムルトヲ得
 本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ
 第七節 鑑定
 第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルトヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

○第百七十六條
條參看

○第百七十七條
條參看

○第百八十條
參看

第百九十二條 鑑定人ハ書記ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼
出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スル
及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス
可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ
處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス
可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記
載シ之ニ宣誓書ヲ添置ス可シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ

○刑法第百七
十九條醫師化
學家其他職業
ニ因リ官署ヨ
リ解剖分析又
ハ鑑定ヲ命セ
ラレタル者故
ナクシテ之ヲ
肯セサル時ハ
四円以上四十
円以下ノ罰金
ニ處ス

○第百八十一
條同百八十二
條ヲ參看スベ
シ

肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十
九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故
及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル
者ニハ鑑定ヲ命スルヲ得ス但急速ノ際正當ノ鑑定人
ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スル
ヲ得

第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權
ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムル
ヲ得

第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑

定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ
 若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ
 鑑定人意見ヲ與ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自
 ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ
 第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺
 印及ヒ契印ス可シ
 又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取りタル年月日ヲ記載シ
 書記ト共ニ檢印ス可シ
 鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ
 外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シ
 タル通事ノ作りタル譯本ヲ添置ク可シ
 第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用

△現行犯
 ノ豫審
 予給與ス可シ
 第八節 現行犯ノ豫審
 第二百一節 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪ア
 ルトヲ知りタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢
 事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ル
 ヲ得
 豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタ
 ル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得
 第二百二節 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ
 豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者ト
 ス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルトヲ記載ス可シ
 豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其

豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルトヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ得但無聲言渡ヲ為ラズ得ズ證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

○第二百三條 參看
第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フト得但令狀ヲ發スルトヲ得ス

司法警察官ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速

ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直ニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルトヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲ストヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

△保釋

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得
被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可

シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消ス^トヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ

意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハズ檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ續付スル^トヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スル^トナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求^ル爲^メ一切訴訟書類ヲ送致ス可シ

△豫審終結

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ
 第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時
 ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判
 事其請求ヲ消セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二
 十四時内ニ之ヲ還付ス可シ
 第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハ
 ス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ
 第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其言渡ニ非サルコ
 ト認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者
 ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ
 第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ

爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可
 シ
 一 犯罪ノ證據充分ナラサル時
 二 被告事件罪ト爲ラサル時
 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 四 確定裁判ヲ經タル時
 五 大赦アリタル時
 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時
 本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要件
 ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス
 第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ
 違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケ

タル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告入勾留受多ル場合於テ罰金刑該可キ者思料多ク時釋放言渡ヲ奇裁獨ノ刑ニ該可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又保釋ヲ爲ス可キ得若シ被告人未タ勾留ヲ受ケル時ハ令狀ヲ發スル可キ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キト記載ス可シ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルト公訴受理ス可カラサルト及ヒ其理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

○第三百三十條
總テ令狀ニハ
被告事件及ヒ

被告人ノ氏名
職業住所ヲ記
載ス可シ但召
喚狀ヲ徐クノ
外其氏名分明
ナラサル時ハ
容貌體格等ヲ
明示ス可シ
又令狀ニハ之
ヲ發スルノ年
月日時ヲ記載
シ豫審判事及
ヒ書記署名捺
印ス可シ
勾引狀勾留狀
收監狀ハ巡查

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢
畢民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第
二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲
スコトヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スル丁能ハサル場合ニ於
テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪
裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記
載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言
渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人
ハ假ニ被告人ノ財產ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請
求スルヲ得

ヲシテ之ヲ執
行セシム
○第二百四十
六條以下ヲ參
看ス可シ

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判
事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ
差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫
審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得
一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サハル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲ス

△豫審上
訴

丁ヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス丁ヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セズ但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫

審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲ス丁ヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スル丁ヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ

若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得

會議司ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スル

コトヲ得

第二百四十一條 會議司ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議司ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議司ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議司ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取

○第二百三十七條參看

調ヲ爲スヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議司ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議司ニ申立ツルヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得 輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲ス可ク得
 附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可ク對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス可ク得
 第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス
 第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可クシ
 第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可クシ
 豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其
 ○第二百三十三條 故障ハ其裁判所會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及

ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決スベシ
 會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲ス可ク得
 第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可クシ
 第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可ク得
 第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル
 全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可クシ
 又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可ク得
 第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可クシ
 第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可ク得
 第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル

者アルトヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシ可シ
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可トヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キト及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被

告人上訴ノ權ヲ失フナカレ可シ

○第三百十一條ヨリ第三百十三條マデヲ參看ス可シ
第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マデノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可ヌ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付

因又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スル丁ヲ
得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受ケ
ル丁ナシ但守押ヲ置ケ丁アル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非ズシテ出
廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スル丁ヲ得若シ出廷シテ辯
論スル丁ヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可
シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フル丁
ヲ得

辯護人ハ裁判所ノ屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但
裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯

護人ト爲ス丁ヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ
辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之
ニ従ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被
告人ヲバ退廷セシノ若クハ勾留スル丁ヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言
渡ヲ爲ス丁ヲ得

若シ辯論ニ日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷ス
ル丁能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス
辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒
ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ

後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間
辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタ
ル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ビ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタ
ル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スナク裁判言渡ヲ爲
ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可被告人公判ノ日
時ニ出廷セズト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀本人
ニ送達シタルノ證有二非ハ關席裁判ヲ爲ス可カラス
豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スル丁能ハ
サル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限
内ニ被告人出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲ス可キノ告知

書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

第二百七十條 關席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フ
ル丁ヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スル丁能ハ
サルノ事由ヲ證明スル丁ヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意
見ヲ聽キ裁判ヲ延期スル丁ヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖
モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ
爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ
相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又

ハ退廷セシムルヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケザル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ビ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄權又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得

○第二百三十七條左ノ場合ニ於テハ檢事被_レ告人又ハ民事原告人ヨリ豫_レ審終結ニ至ルマテ豫_レ審判ヲ得
 一豫_レ審判事又ハ其配偶者ト被_レ告人被害者又ハ是等ノ者

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲ス丁ヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本葉ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲ス丁ヲ得此場合ニ於テハ本葉ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル理由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲ス丁ヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本葉ノ裁判言渡ニ至ルマデ

何時ニテモ之ヲ爲ス丁ヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本葉ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲ノ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求

ノ配偶者ト親屬ナル時
 二豫審判事被_レ告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
 三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

○第二百三十
八条忌避ノ申
立ハ豫審判事
ニ之ヲ爲ス可
シ但其申立ヲ
爲スニハ趣意
書ニ通テ書記
局ニ差出ス可
シ
書記ハ趣意書
ヲ豫審判事ニ
送致シ豫審判
事ハ其送致ヲ
受タルヨリ二
十四時内ニ其
申立ヲ認可シ

ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書
及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルコトヲ得
是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス
第二百八十五條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢察官其
他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ
職權ヲ以テ之ヲ呼出スコトヲ得
豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關
係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書說明ノ爲メ之ヲ呼
出スコトヲ得
第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ
呼出スコトヲ得
豫審ニ於テ録取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼

又ハ棄却スル
コトヲ趣意書ノ
紙尾ニ記載シ
一通ヲ書記局
ニ藏置シ一通
ヲ本人ニ送達
ス可シ
○第二百四十
五條檢察官ハ
被告又ハ民
事原告人ヨリ
之ヲ忌避スル
コトヲ得ス若シ
自ラ回避ス可
キ者ト思辨シ
タル時ハ其旨

出サ、ル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ
公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關
係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セ
シムルコトヲ得
第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人
ニモ亦之ヲ適用ス
第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又陳述
前辯論ニ立會フ可カラヌ
第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可
一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

ヲ會議局ニ申立ツルヲ得
 檢事補自ラ回避ス可キ者ト
 愚料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ
 檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ
 ○第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可若シ之ヲ遺失シタ

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目録ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得
 第二百九十一條 證人及ヒ被告ハ裁判長ニ非ザレハ之ヲ訊問スルヲ得ス
 陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告ハヲ訊問スルヲ得
 訴訟關係人ハ辨論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得
 第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト愚料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之

ル時ハ其人違ナキヲ證明ス可シ
 以下略ス

ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
 其ノ證人ノ陳述ハ書記之レヲ録取シ豫審判事ニ送致ス可シ
 本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得
 第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ
 但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
 一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二円以上十円以下ノ罰金
被告人關席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖
モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ
送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日內ニ出廷スルヲ能ハサリシ正
當ノ彈劾ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見
ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所
開聽ノ後ハ其關聽シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴
訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ
延期スルノ言渡ヲ爲ス可シ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意
見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セザル
時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍
及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦
前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期シタル時
ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ
新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セザ
ル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼
出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分

○第百九十一
條豫審判事ハ
犯罪ノ性質方
法及ヒ結果ヲ
分明ナラシム
ル爲メ鑑定人
ヲ必要ナリト

スル時ハ學術
 職業ニ因リ鑑
 定スルヲ得
 可キ者一名又
 数名ヲ鑑定
 ヲ爲サシム可
 シ
 以下略ス
 ○第二百九十
 三條ヲ參看ス
 ヘツ
 ○第五百十六
 條被告人又ハ
 對質人擧ナル
 時ハ書面ヲ以
 テ問ヒ啞ナル

ス可シ
 第二百九十八條 被告人^{コウケンシヤ}者^{コウケンシヤ}啞者^{コウケンシヤ}又ハ國語ニ通セサル者
 ナル時ハ第五百五十六條第五百五十七條ノ規則ニ從フ
 第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述
 ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ
 定ム可シ
 裁判長ハ事實^{ジツ}見^ミノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以
 テ其順序ヲ變更スルヲ得
 第三百條 證據^{コウケンシヤ}調濟^{コウケンシヤ}ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護
 人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得
 ス

時ハ書面ヲ以
 テ答ヘシム若
 シ聽者啞者又
 字ヲ知ラサル
 時ハ通事ヲ命
 ス可シ
 被告人又ハ對
 質人國語ニ通
 セサル時亦同
 シ
 ○第五百十七
 條通事ハ正實
 ニ通譯ス可キ
 ノ宣誓ヲ爲ス
 可シ
 書記ハ通事ニ

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スヲ得ス但
 辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可
 シ
 第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ
 本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ
 第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタ
 ル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判
 決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判
 言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス
 第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ
 其訴訟ニ關係スルヲ得
 又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシム

調書ヲ讀_{ヨミ}闕_ケセ
之ニ署名捺印
セシムベシ
第百九十二條
第百九十三條
第二百條ノ規
則ハ本條ニモ
亦之ヲ適用ス

ル_レヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決
ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待_マタス直_チ
ニ控訴又ハ上告ヲ爲ス_レヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨
論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ利ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ
法律ニ依リ其ノ理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可
シ

免_メ訴_ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人
ニ對シ犯罪ノ證據ナキ_{コト}ヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ

裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未_ク充分ナラザル時ハ公訴ノ裁判アリ
タル後其裁判言渡ヲ爲ス_レヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職
權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ

言渡ヲ爲ス可シ

冤訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用
ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴_シタル者之ヲ擔
當ス可シ

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス
沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之

ヲ還附スルノ言渡ヲ爲スコシ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限內又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ

其裁判所ノ書記ニ差出スコシ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ノ回復ス

ルコトヲ得但變厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限內ニ

其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲スコシ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日內ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲スコシ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ理由アルニ非ラサレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終タル後公庭ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲スコシ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其板書ヲ求ムルヲ得但し上訴ノ爲メ其求メヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡

ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又關席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ

對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記

載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由

四 原被證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立可

キ事件ヲ申立タル丁是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴
訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六辯論ノ順序及ヒ被告人ヨシテ最終ニ發言セシメタル
車

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ
外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官
及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタル
トヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス
可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ

整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢關シ若
シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁
判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判
始末書ノ謄本ニ捺印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因リ
テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタ
ル呼出狀

○違警罪
公判

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移
スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職
業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシム
ルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ
場合ニ於テ被告人ホタ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公廷ニ
テ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲ノニ
日ノ猶豫ヲホムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二
日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急遽ヲ要スル
時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因

リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分
ヲ爲スヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少ク
トモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺
ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳
述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ
呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判
ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年
齡身及職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作りタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證據ヲ差出スニ及ハズ但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又タハ職權ヲ以テ之レヲ差出サシムルヲ得ス

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證據アル時

ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ關席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ關席シタル者又ハ其任所ニ之ヲ送達ス

可シ
 關席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書
 ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其申立書ヲ書記局ニ差出
 ス可シ
 第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理
 ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタ
 ル時ハ書記ヨリ故障アリタル丁及ヒ其事件ヲ公判ニ付
 ス可キ日時ヲ故障ノ對手ハニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送
 達ス可シ但其送達ト出延トノ間少クトモ二日ノ猶豫ア
 ル可シ
 又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知
 ス可シ

○第三百二十
 六條書記ハ各
 事件毎ニ訴訟
 關係人ノ氏名
 ヲ呼立ツ可シ
 若シ其呼立ニ
 應セサル時ハ
 他ノ事件ノ裁
 判ヲ終リタル
 後其事件ヲ裁
 判ス可シ
 以下略ス
 ○第三百二十
 四條中第三公
 訴ノ期滿免除
 ト爲リタル時

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ
 第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更
 ニ裁判ヲ爲ス可シ
 其裁判ニ關席シタル者ハ故障ヲ爲ス丁ヲ得ス
 第三百三十五條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ
 於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ
 又第三百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡
 ヲ爲ス可シ
 第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證據充分ナル
 時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
 第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違
 ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但

四確定裁判ヲ
 經タル時
 五大赦アリタ
 ル時
 六法律ニ於テ
 其罪ヲ全免ス
 ル時
 本條ノ場合ニ
 於テ被害者ハ
 民事裁判所ニ
 非サレハ要償
 ノ訴ヲ爲スコ
 ト得ス

被告ハニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左

ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一 被告ハハ勾留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告ハ及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言

渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル理由アラサ

ル時ト雖モ管轄違越權據律ノ錯誤又ハ無効ノ記載ア

ル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書

記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁

判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又關席裁判ニ付キ故障アラ

サル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ
 五日内トス
 控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手ハ
 ニ通知ス可シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控

訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受

ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局

ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取

掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可

シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲ス丁ヲ得但附帶ノ控訴ハ公庭ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判

言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判

言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノニ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡ス丁ヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ關係裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス丁ヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公

訴ヲ受理ス

○第三條 輕罪公判

○輕罪公判

○第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人又ハ民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ關係裁判ノ爲

ス可シ民事原告人出廷セサル時亦同シ以下略ス

○第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受テ可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルコト得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルコト得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ民事原告人及民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコト得

第三百五十條 該人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ一日ヲ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十四條 規則ハ豫審ヲ經サル

事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サル時ハ公廷ニテ其告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メニ日ノ猶豫ヲ求ムルコト得

○第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫ア

輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名住所職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之レヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯護ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ答辯ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

ル可シ
 ○第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヲ得

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヲ得
 第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ關席裁判ヲ爲スヲ得可キ被告人共呼出ノ日時ニ出廷セサル時キハ關席裁判ヲ爲ス可シ
 第三百五十五條 關席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此ノ章ニモ亦タ之レヲ適用ス
 第三百五十六條 關席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ノ除クノ外刑ノ期滿見除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヲ得
 一 被告人本條ノ裁判前豫ノ裁判ス可キ事件ヲ申立タル

九條禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ關席裁判ヲ爲ス可カラズ豫審終結ノ言渡書及ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヲ能ハサ

時
 二 裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時ニ
 三 被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時
 第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲スヲ得
 第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲ノ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

ル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限ニ被告人出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲メ可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長ニ送達ス可シ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示ル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

○第二百二十四條中第三公訴ノ期間免除ト爲リタル時

四確定裁判ヲ經タル時

五六赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル

ノ訴ヲ爲ス
 ○第二百五十
 三條會議局ニ
 於テ必要ナリ
 トスル時ハ判
 事一名ヲシテ
 更ニ豫審ヲ爲
 シ又ハ其豫審
 スル所ノ條件
 ニ付キ更ニ取
 調ヲ爲シ其報
 告書ヲ差出サ
 シム可シ
 ○第二百五十
 五條會議局ニ

場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトヲシテ其事件ヲ
 重罪ナリトスル時管轄違ノ言渡ヲ爲可シ
 檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ
 第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審
 院ノ判決アルマデ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職
 權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ
 爲ス可シ
 又第二百十條以下ノ規則ニ從テ保釋ニ付キ判決ヲ爲ス
 可シ
 第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時
 ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
 被告人禁錮ノ刑ノ言渡シヲ受ケタル時キハ當然保釋責

於テ故障ノ取
 調中共犯ノ起
 訴ヲ受ケサル
 者アルコト附帶
 ノ犯罪ニ付キ
 豫審ヲ受ケサ
 ル者アルコトヲ
 發見シタル時
 ハ檢事ノ請求
 ニ因リ又ハ職
 權ヲ以テ判事
 一名ヲシテ豫
 審ヲ爲シ其報告
 書ヲ差出サシ
 ム可シ檢事ハ
 意見書ヲ差出

付テ取消シタルモノトス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコ
 トヲ得
 第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從
 ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スル
 コトヲ得
 一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪
 事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪
 ナリトスル時
 二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ
 受ケタル時
 三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言
 渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

ス可シ
會議局ニ於テ
ハ報告書其他
訴訟書類ニ依
リ故障ト共ニ
之ヲ判決ス可
シ
○第二百十條
豫審判事ハ豫
審中勾留狀又
ハ收監狀ヲ受
ケタル被告人
ノ請求ニ因リ
檢軍ノ意見ヲ
聽キ何時ニテ
モ呼出ニ應シ

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權濫權ノ錯誤又ハ
無效ノ記載アル規則ニ背キタル時
第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ
之ヲ爲ス可シ得
關席裁判ヲ受ケタルモノハ刑ノ期滿迄ニ至ルマテ何
時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲ス可シ得但
シ第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之レヲ爲ス
可シ
第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場
合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控
訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ
第三百六十八條 第三百六十九條ヨリ第三百四十二條マ

○重罪公
出廷ス可キノ
證書ヲ差出サ
シノ保釋ヲ許
ス可シ得
被告人無能力
ナル時ハ親屬
又ハ代人ヨリ
保釈ヲ求ムル
可シ得
以下之ヲ畧ス
○第三百五十
六條ヲ參看
○第三百三十
九條ヨリ同三
百四十二條マ
テ及ヒ第三百

テ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此ノ章ニモ亦マ之レヲ
適用ス
第三百六十九條 輕罪裁判所檢軍ノ控訴又ハ檢軍長ノ附
帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトス
ル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪
裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百七十條 控訴ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審
ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ
第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ
終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ
對シ上告ヲ爲ス可シ得
第四章 重罪公判
○第四章重罪公判
七十四

四十四條ヲ參
 看
 ○第二百五十
 五條會議局ニ
 於テ故障ノ取
 調中共犯ノ起
 訴ヲ受ケサル
 者アル丁附帶
 ノ犯罪ニ付キ
 豫審ヲ受ケサ
 ル者アルヲ
 發見シタル時
 ハ檢事ノ請求
 ニ因リ又ハ職
 權ヲ以テ判事
 一名ヲシテ豫

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公
 訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件
 フ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ
 言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時
 ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

一 控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀
 ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀
 ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲ

シテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告ノ姓名及ビ加重減輕ノ模様

二 被告ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ集取シタル原級ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡シノ概

略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書

ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告ハヲ記載ス可ク

ラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被
 告人ニ對シテ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合

審ヲ爲シ其報
 告書ヲ差出サ
 シム可檢事ハ
 意見書ヲ差出
 ス可シ
 會議局ニ於テ
 ハ報告書其他
 訴訟書類ニ依
 リ故障ト共ニ
 之ヲ判決ス可
 シ

ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スコトヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルコトヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルコトヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日以前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人

ヲ選任シタリレバ各別ニ之ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代理人ヨリ與議ノ申立ナキ時ハ代理人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルコトヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

○第三百七十八條參看

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルノアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲ス可ト得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト推見スルヲ得

○第三百七十七條ヨリ同三百七十九條マテ參看

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡ノルマテ被告人ト推見スルヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受ケル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目録ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ、カキテ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス。但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得。

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ。

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開庭ス可キコトヲ陳述ス可シ。但被告入ヲ呼出ス可カラズ。

第三百八十七條 裁判長辨論二日以上ニ渉ル可シト想料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以

テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得。
第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辨論ニ取掛ル可シ。

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ。
若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト相違アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辨論ヲ爲ス可シ。

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ。
其呼立ニ應ジタル證人ハ陪席ニ退カシテ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ。

第三百九十一條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キトテ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十二條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ自狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

被告人ノ自狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラス

第三百九十三條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證據ヲ差出スニ從ヒ其證據ニ付キ辯解ヲ爲シ且自白ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キトテ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十四條 被告人ハ陳述ヲ爲シタル後其知照ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退庭ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラ

ス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スル丁又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムル丁ヲ請

求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト

思料シタル時キハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ

○第三百條証
 憑調濟ノ後檢
 察官民事原告
 人被告人其辯
 護人及ヒ民事
 擔當人ハ順次
 發言ス可シ
 檢察官其他証
 訟關係人ノ陳

職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヲ
 得
 裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告ハテ公廷ニ呼
 入レ共陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時
 ハ之ヲ申立シム可シ
 第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續キノ
 終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヲ言渡タス
 可シ
 第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタ
 ル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求
 ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事
 一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

述ハ他ヨリ妨
 礙スルヲ得
 ス
 檢察官其他証
 訟關係人ハ迭
 ヒニ辯論ヲ爲
 スヲ得但辯
 論ノ最終ニハ
 被告人又ハ辯
 護人ヲシテ發
 言セシムベシ
 ○第三百五十
 七條第一項裁
 判所ニ於テ車
 實發見ノ爲メ
 必要ナリトス

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦タ之レヲ適
 用ス
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官
 律適用ノ爲ノ其意見ヲ陳述ス可シ
 被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辯
 論スルヲ得
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ
 私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及
 ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得
 檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
 裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但開庭前
 之ヲ判決ス可シ

ル時ハ檢察官
其他訴訟關係
人ノ請求ニ因
リ又ハ職權ヲ
以テ新ナル証
人ヲ呼出シ鑑
定人ヲ命シ若
クハ臨檢ヲ爲
ス丁ヲ得但是
等ノ處分ヲ爲
スニ付テハ第
三編第三章ニ
定メタル規則
ニ從フ
○第二百二十
四條第三以下

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律
ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ冤訴ノ言渡
ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ
第四百一條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ
爲シ且被告人ヲ放免ス可シ
又原被告ノ賠償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判
言渡ヲ爲ス可シ
第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサ
ル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求
アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシ
テ添審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共

ヲ參看ス可シ
○第三百九十
九條參看

ニ之ヲ裁判ス可シ
第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審
裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス丁ヲ得
第四百四條 關府裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴
狀及ヒ必要ナリトスル添審書類ヲ朗讀セシメ又原被告
人ノ陳述ヲ聽ク可シ
檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ
賠償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
民事擔當人ハ答辯スル丁ヲ得
第四百五條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ
請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ
第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官

ニ非サレハ上告ヲ爲スルヲ得ス
民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡シニ對シ
上告ヲ爲スルヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑
ノ^キ期^{マシ}滿^シ免^シ除^シニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スルヲ得但
捕^ホニ就^スキタル時ハ十日^ヲ內^ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判
所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判
決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會
ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所^イ開^イ廳^ノ後ハ
其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ
控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル
時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受テ可
キノ言渡ヲ爲ス可シ

●大審院
ノ職務
○上告

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セザル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十 擬律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 冤訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ

○第五編大審院ノ職務。第一章上告。八十三

ハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルト又ハ
犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲ス可ト得
ス

○第四百十條
マ参考

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴
ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メ
タル原由ニ付キ上告ヲ爲ス可ト得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何
時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲ス可ト得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲ス可ト得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テ
ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡
アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル
時ハ勾留保釋費付釈放及ビ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執
行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁
判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記
ヨリ之ヲ對手人ニ送達スベシ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日
内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ
對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五

日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上
告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答
辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人
ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告
趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル
後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差
出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意

見アル時ハ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑車局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ法院
長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出
ス可キヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告爲シ又ハ檢察官ヨリ
重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於
テ刑ノ言渡シヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時
ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任
ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑車局判車中ニテ專任判車一名
ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閱シ其報告書ヲ作ル可シ但
自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ執
告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ
擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時
ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ
上告申立人及ヒ對手人ノ代理人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公庭ニ於テ專任判事其報
告書ヲ朗讀スベシ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差
出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時
ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對
スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全
部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可
シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受
理シ又ハ受理セサルノニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル
時ハ其事件ヲ移スナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡

ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタル一アリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヲナクシテ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡シ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ事トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡タル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何

時ニテモ非常上告ヲ爲スヲ得	非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ	第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡シニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其ノ院ニ哀訴スルヲ得	一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時	二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲ササル時	三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時	第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ
---------------	---------------------------------------	--	--------------------------	----------------------------	-------------------------	---

○再審ノ訴	
書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之レヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其ノ答辯書ヲ差出ス可シ	大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ
第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス	第二章 再審ノ訴
第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之レヲ爲スヲ得	但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二章再審ノ訴

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メテレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時
 二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
 三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時
 四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時
 五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時
 第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官
 二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢察長
 三大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ
 四刑ノ言渡ヲ受ケタル者
 五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬
 第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得
 第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證據書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院
檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴
ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス
可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速
ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシ
ム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ擱キ刑事局
判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長
ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メ

アル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審
ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他
ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁
判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場
合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ
其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スナク原裁判言渡ヲ破毀ス
可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ依リ無罪ノ言渡アリタル
時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者
ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

○裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ理由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルノ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲セントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議

同ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲ノ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告ノ身分買取地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危険ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其ノ院ニ之レヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人

○第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

○公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

ノ申立ヲ聽クナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スル丁能ハサルノ恐アル時嫌疑ノ爲ノ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス丁得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲ノ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲ス丁得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲ス丁得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲ノ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一週ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリ

○第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲ノ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

タルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出ス丁得

●裁判執
行復権及
ヒ特赦
○裁判執
行

第六編

裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條

重罪輕罪連繫罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ

非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條

死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速

ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日

内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條

死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時

ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條

刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審

院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ

爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ没收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依

リ之ヲ徴收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ没收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條

死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作

リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名

捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ

定ム

第四百六十四條

裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル

時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ

作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ

○第六編裁判執行復権及ヒ特赦○第一章執行

爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ姓名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省

ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ

藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ

付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ辯決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就

キタル場合ニ於テ八違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定ス

ル爲ノ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事

實參考ノ爲ノ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書

記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公庭ニテ刑ノ言

渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言

渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

〇復権

〇刑法第六十三條公權ヲ剝奪セラレタル者ハ主刑ノ終リタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ノ公權ヲ復スルヲ得
主刑ノ期滿免除ヲ得タル者

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復権
第四百七十條 復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復権ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ
一 裁判言渡書ノ謄本
二 主刑ノ期滿特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
四 賠償及ヒ裁判費用ヲ濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書
五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類
第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ヤハ速ニ上奏ス可シ

ハ監視ニ付シタル日ヨリ五年ヲ經過スルノ後亦同シ

○ 刑法第六十
 三條公權ヲ剝
 奪セラレタル
 者ハ主刑ノ終
 リタル日ヨリ
 五年ヲ経過ス
 ルノ後其情狀
 ニ因リ將來ノ
 公權ヲ復スル

シ

第四百七十五條

勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願

ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢察長

ニ通知シ檢察長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢察

長

ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定ツタル期限ノ

半ヲ経過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其

裁可狀ヲ控訴裁判所檢察長ニ送致シ檢察長ヨリ願書ヲ

差出シタル始審裁判所檢察長ニ送致ス可シ

檢察長ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

○特赦

丁ヲ得
主刑ノ期満
免除ヲ得タル者
ハ監視ニ付シ
タル日ヨリ五
年ヲ經過スル
ノ後亦同シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ
其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテ
モ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申
立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ釋由ス可シ
但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ
添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニ
テモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ	
第四百七十九條	特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ
第四百八十條	特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ
此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ	
治罪法終	

○第四百七十六條參看

明治十三年九月二十九日御届
同 十二月十七日別製合本御届

定價金三十錢

編纂人

大阪府士族

三輪 鑿藏

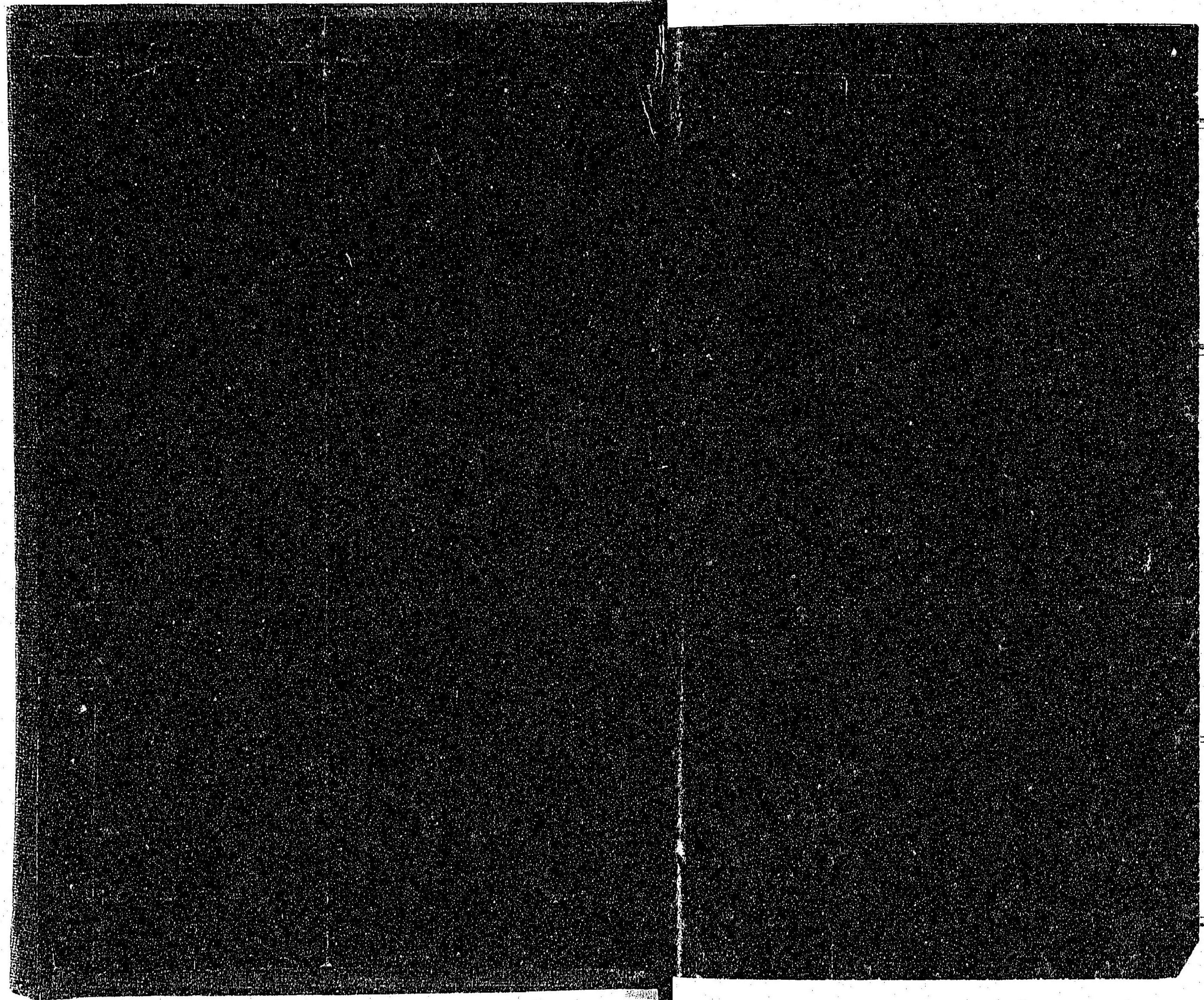
府下東區平野町三丁目
三十四番地

出版人

大阪府平民

吉岡 平助

府下東區楠后町四丁目
三十七番地



1

2

3

4

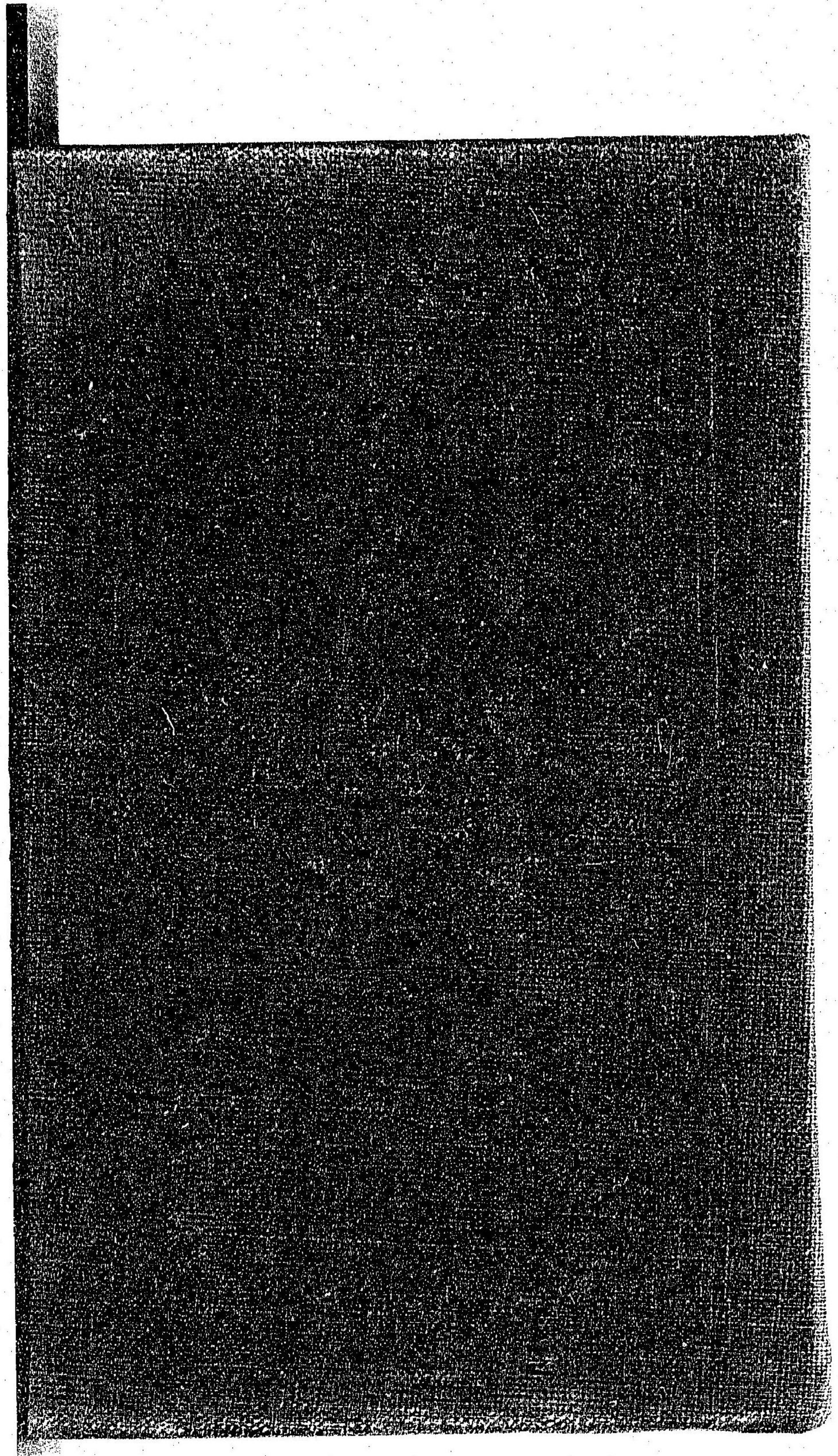
5

6

7

8

9





035838-000-4

特61-605

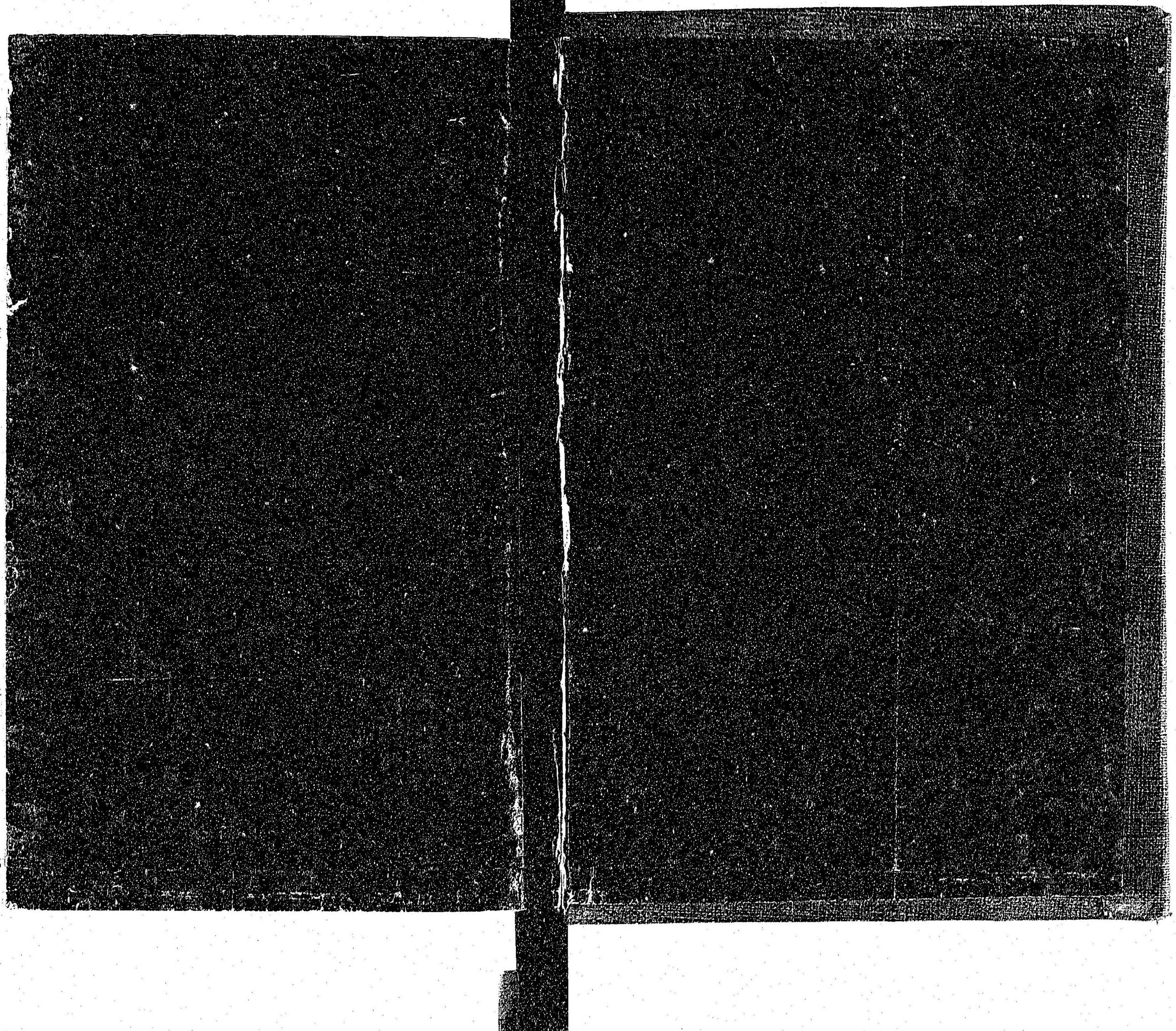
刑法治罪法解釈 (龍頭索引)

三輪 肇蔵 / 編

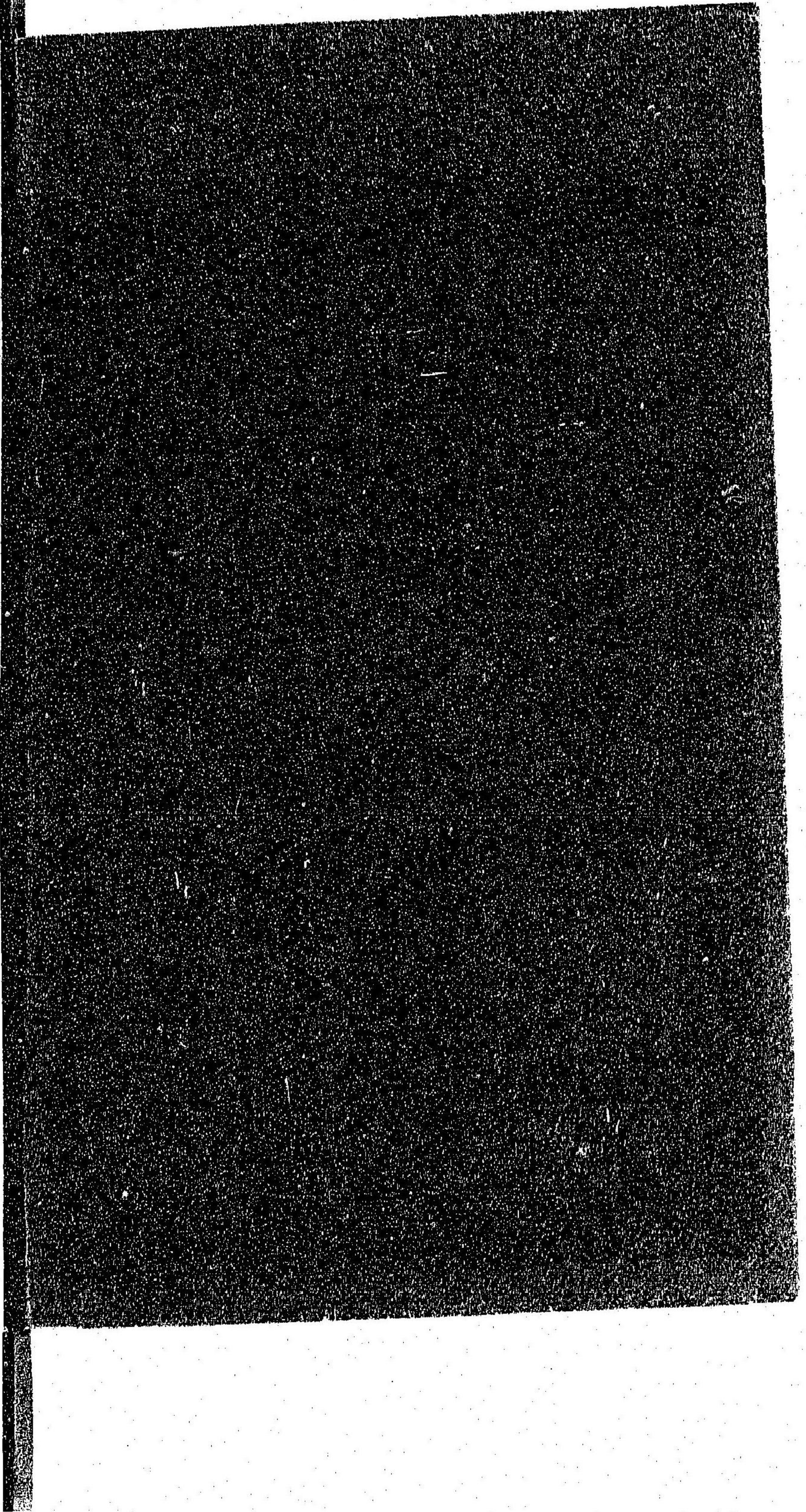
M13

BBP-0424





東洋圖書印



東京圖書印

